

学校白慢

グローバル人材育成に挑む

～ English day ～

流山市立南流山中学校長

こばやし のぶや
小林 信弥



1 English day 始まる！

生徒が口々に「Good morning！」と元気にあいさつをし、登校してくる。4月、第1回の English day、朝の光景である。生徒たちの意識は高く、廊下や教室でも「Good morning!」が聞こえてきた。教師も負けてはいない。出欠席確認を英語で行ったり、朝の会も英語を交えて行ったりする教師が何人もいた。そういう学級では、生徒も英語で朝の会の連絡をしようとする。その日、朝の職員打合せの司会も英語だった。前日に英語科の教師に聞いて司会の言葉を予習していた。発言者の何人かは英語で連絡をしていた。昼の放送も、放送委員の生徒たちが自主的に英語で放送を始めた。全てが初めての出来事で、新鮮な驚きと高揚感を感じた。生徒が恥ずかしがって英語を使わないのではと心配したが、杞憂に終わった。

2 なぜ English day か？

本校は、平成26年度に文部科学省から英語教育強化地域拠点事業の拠点校に指定され今年度で3年目を迎える。英語で自由にコミュニケーションができるグローバル人材につなげるための研究を行っている。その取組の一つが本年度から始めた English day である。English day の日は、朝登校してから給食終了までの日常会話をできるだけ英語で行う。毎月1回、第3木曜日に行っている。英

語の授業だけでなく、授業外、教室外でも英語を使う練習をするのが目的である。そして、英語を話すことに興味を持ち、話せるようになりたいという意識の醸成になればと考えている。

3 English day の今は？

7月の第4回では、英語科がひと工夫した。クイズ (Trivia in English!) を3問書いたプリントを生徒全員に配付。答えは教師の誰かが知っているという設定で行ったところ、多くの生徒が休み時間に教師に英語で質問するという現象が生まれ、アンケート調査の数値がぐーんと跳ね上がった。しかしながら、一歩踏み出す勇気がなくて英語で話すことをためらう生徒も少なくない。更に工夫を重ね、英語でのコミュニケーションにトライする生徒を増やしていきたい。

English day はどんな成果を生み出せるか、今後が楽しみである。



Do you know this answer?

提

言

伝統からの教え

能楽師 シテ方観世流 九世 はしおかきゅうたろう 橋岡久太郎

はじめに

能楽は、今からおおよそ 650 年前に生まれた世界最古の古典演劇。ただ古いだけでなく当時の台本・演出をそのまま伝え、能面・装束までもが今なお実際の使用に耐えうる特殊な演劇である。現在世界中で親しまれているシェイクスピアの最古の上演が 400 年ほど前ということを見ると、能楽がいかに古い時代に完成されていたかがわかる。その価値が認められて、我が国の数ある伝統芸能や伝統技術の中で世界無形文化遺産第一号に認定された。

私は、能楽の元祖的流派であるシテ方（※能楽における主役）観世流 橋岡家に生を受け、3 歳のとき「老松（おいまつ）」で初舞台を踏み、8 歳のとき観世流のヨーロッパ 7 か国公演に加わり「菊慈童（きくじどう）」のシテを務めた。その時にスウェーデン国王をはじめ各国の国家元首にも謁見した。シェイクスピアより 200 年以上も古い古典芸能の主役を日本で言う小学二年生がつとめ、演劇として成り立っていることがヨーロッパ人にとっても驚かれた。スウェーデンでは、先代である父（八世 橋岡久馬）が最高勲章を受章し、幼かった私は国王から「幸せを運ぶ馬（ダラナホース）」の置物を賜わり、幼心にもたいへん光栄なことだと感激したことを覚えている。以来 50 年、海外公演は 17 カ国 38 都市を数える。

私は、日本の伝統文化を継承する能楽師

であり、一方では、三人の娘を育て上げた一人の父親でもある。特別なことはなにもなく、ごく普通の家庭の子育てだったと思う。一つ気をつけたのは、基本的な礼儀を徹底させたこと。娘が朝起きて親に対して「おはよう」と言おうものなら、必ず「おはようございます」とやり直させた。今、娘たちは大人になり、それぞれの人生を歩んでいるが、我が家は常にお互いを愛しあい尊重しあう関係にある。

私から、子どもたちを教育する立場にある皆さんに次の三つのことを提言したい。

1 本物に触れる機会をたくさん与えること

私が見てきた欧米の各都市にはすばらしい美術館、博物館が市民の身近に存在し、そこでは常に音楽会や演劇が催されて、街自体が成熟していた。そういう場所で育った子どもたちは幼いころから本物を目にしている。すばらしい音楽、絵画、お芝居。大人が難しいことを教える必要はない。子どもたちにはわかる。本物に触れた時に、言葉では言い表せない独特の感覚が芽生え、更なる知の好奇心と教養が育まれる。能楽のように 650 年もの間、社会が変化しても変わらず継承されてきたものには意味がある。無駄のない動きと世界観は、非の打ち所がないほど完成されている。子どもたちには先入観なく、そうした本物を感じて欲しい。また、自分が生まれ育った国の伝統芸能が世界の人々に誇れ

ることを教えると、小学一年生でも目を輝かせ、自国に誇りを持ち、自国との絆を意識する。

2 想像力、共感力を伸ばすこと

そのためには、子どもたちにたくさん本を読ませることが大切。国内外を問わず、童話でも小説でも何でもいい。以前、能楽の体験授業で小学校を訪問した際に実感したことがある。当時大人気だったファンタジー映画を観たことがあるか質問をすると、たくさん子どもたちが手を挙げた。次に、その原作を読んだことがあるかと聞くと、その半分位子どもたちが手を挙げた。さらに、映画と原作本どちらが楽しかったかと質問したら「本!」と答える子どもが大勢いた。つまり、子どもたちは、最新技術を駆使した映像よりも行間に広がる想像の世界をはるかに楽しむ能力を持っているということだ。これが想像力や共感力ではないだろうか。この感覚が磨かれていなければ、文章の読解力だけではなく、実際の人間関係における会話も、きつとうまくいかないのではないか。能楽もまた、そうした感覚を育む舞台である。観世流の演目に「吉野天人（よしのてんにん）」という話がある。澄みきった月光のもと、舞い降りた天人が吉野の山一面に咲く桜の花と戯れるかのように舞うストーリーだが、実際の舞台上に置かれているのは一本の桜の枝のみ。しかし、一流の能楽師が舞うと観客の目にはそれが数千本の桜に映る。現代社会における陰惨ないじめや少年犯罪は、こうした感覚がまるで欠如していることに起因するのではないか。

3 「形」を身に付けさせること

言い換えると、正しい言葉、礼儀、行動。能楽の世界では「形」を厳しく身に付けさせ

られた。能楽には、三十六歌仙に因み、歌仙会なる催しがある。二百余りある現行曲から三十六曲を選ぶのだが、短い曲で30分、長いものになると2時間をゆうに超える。三十番以上を行うと一日どころか数日がかりになってしまうので、聞かせどころを行う「囃子」という形式で行う。それでも10時間以上掛かってしまう。夏の日長い稽古は本当に過酷で、逃げ出したいと思うことも度々あった。しかし、そんな厳しい稽古、催しが能楽師にとっては極めて効果的に芸を身につける「行」なのだ。近年、厳しいこと、辛いことを強いるのがいけないとされる風潮があるようだ。しかし、私から言えば、幼少から青年期までの修行が、一番身に付き、不思議なほど忘れぬものになっている。若い頭脳、若い身体は想像を遥かに超えてすばらしく何ごとでも吸収する。余談になるが、世襲の能楽師は幼い頃から「形」が身についている。歌舞伎でも養成所から入ってきた役者は独特の言い回しに苦労するという。どの世界でもざっと動けるのに10年はかかる。世襲の能楽師は生まれながらの血の滲むような鍛錬により自然に動ける。教育の世界でも、いい意味で、厳しく「形」を身につけることを是としていいのではないだろうか。「一度苦労して身につけた知識や技能は、何人からも奪われない」これが私の考えである。

おわりに

少子高齢化、家庭環境の多様化、情報化社会と、子どもたちを取り巻く環境が著しく変化する中、皆さんは日々対応に苦慮することと思う。しかし、能楽のように社会が変化しても少しも変わらぬものもある。先生方には、私の思いを頭の片隅においていただき、子どもたちの輝かしい未来に向けた、元気な教育を行って欲しい。